

ンドリン)を対象とした定性、定量測定を行なったが四肢奇形の原因を疑わせるような高値は検出されなかった。

3. 研 究 会

課題 1. ニホンザルの群れの統合機構

期 日 昭和56年12月12・13日

場 所 霊長類研究所会議室

参加者 約60名

プログラム

1. 近接関係と性関係
藤 井 尚 教(阪大・人間科学部)
2. ヤクザル自然群の採食時における個体間距離
古 市 剛 史(京大・理学部)
3. 群れの統合に関わる餌の問題
森 明 雄・大 沢 秀 行
(京大・霊長研)
4. 下北研究林のニホンザル社会
鈴 木 延 夫(北大・文学部)
5. 個体と群れのあり方
糸魚川 直 祐(阪大・人間科学部)
6. ニホンザル研究における現象学的アプローチの可能性
菅 原 和 孝(北大・文学部)
7. ニホンザルの群れの統合機構についての理論的考察
乗 越 皓 司(上智大・生命研)
8. ニホンザルの社会性
川 村 俊 蔵(京大・霊長研)
座 長 大 沢 秀 行・川 中 健 二
(岡山理科大・理学部)
岩 本 俊 孝(宮崎大・教育学部)
川 村 俊 蔵・根ヶ山 光 一
(阪大・人間科学部)
杉 山 幸 丸(京大・霊長研)

ここ10年ほどの間にニホンザルの生態・社会の研究はどんな進展をみたか。第1は、主としてヤクシマ研究グループによる努力の積み重ねの結果としてあらわれた、餌付けを伴わない自然群の研究が社会学のレベルに達してきたことであろう。

それは、50年代前半の幸島・高崎山における餌付け成功以来進められてきた餌場の社会学に対する批判と反省がデータとなって結実し、順位と優劣の社会学に大幅な修正が加えられたことを示している。もう1つは、個体群生態学が食物量・成長量・繁殖成功率の関係として論じられるようになり、集団の統合機構も生物経済学的に把握されるようになったことである。

一方、さまざまな変異の発見されたニホンザルの統合機構を理論化し、他の霊長類との比較の上に位置づける試みは、その方法論の段階で難渋しているのが現状である。これまで霊長類の社会構造はヒトとの比較に中心的な視点があったが、視野を哺乳類、あるいは脊椎動物全体に広げて、その生態の中に位置づける必要性の指摘は、今後の発展に重要であろうと思われる。

(杉 山)

課題 2. 霊長類の適応

——適応の研究に関する諸問題——

期 日 昭和56年12月4・5日

場 所 霊長類研究所会議室

参加者 約50名

プログラム

1. 適応放散について
野 上 裕 生(京大・霊長研)
2. シカ類の前進的進化における生態的・形態的適応
大 泰 司 紀 之(北大・歯)
3. 遺伝学からみた適応
野 澤 謙(京大・霊長研)
4. 骨の構築からみた機能的適応
木 村 賛(帝京大・医)
5. ホルモンと神経による自発運動の調節
川 島 誠一郎(広大・理)
6. 社会性の進化
伊 藤 嘉 昭(名大・農)
7. ニホンザルの適応について——生態学的見地から
伊 沢 紘 生(宮城教育大)

本研究会は世話人代表を近藤四郎とし、近藤のほか、岩本光雄、和田一雄、鈴木晃が世話人となっ

て開かれた。いろいろの研究分野の方から、霊長類研究にこだわることなく、それぞれの分野での適応に関連する問題点をお話いただき、相互理解をはかっていただくこととした。最初の話題はあらかじめ、亀井節夫氏（京大・理）にお願いしてあったものであるが、開催直前に亀井氏が御急病のため、急拠、野上裕生氏にお願いした。

各話題ごとに簡単な討論を行った上で、最後に近藤を座長とし、約1時間半にわたり、総合討論を行った。話題提供が多分野にわたったこともあって、内容の具体的記録とまとめは割愛せざるをえないが、世話人以外に石本剛一（三重大）、江原昭善（霊長研）、久保田競（霊長研）、大沢秀行（霊長研）の諸氏が座長役をつとめたこと、阿江茂（南山大）、石和貞男（お茶の水大）、三浦慎悟（兵庫医大）、遠藤萬里（東大）、佐藤方哉（慶応大）、日高敏隆（京大）、川村俊蔵（霊長研）、小原秀雄（女子栄養大）、大沢済（近畿大）、河合雅雄（霊長研）の諸氏、その他の方々から発言があったことを附記し、記録の一環とする。（岩本記）

課題3. 「霊長類の成長・発達」に関する

研究会、第5回

期 日 昭和56年11月26・27日

場 所 霊長類研究所会議室

参加者 約50名

プログラム

1. ニホンザル性皮のホルモン・レセプター
加藤 順三（山梨医大・医）
2. 妊娠後半期サルの腸内分泌細胞の形態
小林 繁（山梨医大・医）
3. 精巢内キチン結合物質を用いての透明層反応機構の解析
及川 胤昭（山形大・理）
4. 無排卵とエストロジェンの positive feedback
田村 貴（自治医大・医）
5. 血液からみたニホンザルの発達
竹中 晃子（京大霊長研）
6. 小脳一大脳皮質投射の生後発達の可塑性
川口 三郎（京大・医）
7. ニホンザルの奥行視の発達

辻 敬一郎（名大・文）

8. 知覚・運動機能からみたニホンザルの発達段階

松沢 哲郎（京大・霊長研）

9. ニホンザル集団における社会的行動の初期発達

木村 光伸（名学院大・経）

10. 重度奇型ニホンザルの行動発達

中道 正之（阪大・人科）

小山 高正（お茶大・家政）

霊長類の系統・種分化・種の特性に関する研究

—— Domestication の生態学と遺伝学——

期 日 昭和56年12月17・18・19日

場 所 霊長類研究所会議室

参加者 約40名

プログラム

1. 動物家畜化の遺伝学
野澤 謙（京大・霊長研）
2. 餌付けがもたらしたニホンザルの生態の変化
杉山 幸丸（京大・霊長研）
大沢 秀行（京大・霊長研）
3. 人類学にとって「家畜化」とは？
江原 昭善（京大・霊長研）
4. 野生稲の雑草性
森島 啓子（遺伝研）
5. 栽培植物の起原——イネ科穀類を中心に——
阪本 寧男（京大・農）
6. 牧民の家畜管理からみたドメスティケーションの諸相
谷 泰（京大・人文研）
7. 家畜とその野生原種との生物学的交流
——ニワトリをその例として——
西田 隆雄（東大・農）
8. マウスの亜種分化と実験動物化
森脇 和郎（遺伝研）
米川 博道（埼玉県癌センター）
9. 遺伝的蛋白変異、特にヘモグロビン型変異からみた家畜牛の起源
並河 鷹夫（名大・農）
10. ブタおよびイノシシ集団における遺伝的関連性

田 中 一 栄 (東京農大)

討論者：一

伊 谷 純一郎 (京大・理)

太 田 至 (京大・理)

福 井 勝 義 (民 博)

福 井 正 信 (筑波大・基礎医)

織 田 銑 一 (名大・環研)

太 田 克 明 (名大・農)

林 良 博 (東大・医科研)

天 野 卓 (東京農大)

Domestication は動植物の繁殖に対するヒトによる管理を意味するが、これがおこなうためには対象動植物とヒトと間に生物学的接近がなければならず、さらに動植物の側にヒトの habitat あるいは人為的環境へ接近する素因、ヒトの側に経済的又は非経済的要因がなければならない。また、domestication によって対象動植物集団の遺伝的組成に変化がおこなうにちがいない。本研究会は、人類文化の重要なエレメントである domestication の機構と要因とを、主として生態学的、遺伝学的側面から解析するための論議の機会をもとうとして企画されたものである。現在、世界的飢餓への危機感に動かされて、動植物の新たな家畜化栽培化の必要性和可能性が論議されており、またわが国ではサルや餌付けという domestication の萌芽形態が社会的にも生物学的にも大きな問題としてとり上げられている。このような時期に domestication を主題とする研究会を開催することは意義あることと考えられた。

従来わが国でこのような内容の研究会、シンポジウムなどが開催されたことはない。今回専攻分野を大きく異にする20人の研究者が一堂に会し、3日間にわたり10の話題が提供され、動植物の domestication という一点に問題をしばって研究結果の発表と討論とがおこなわれたことは、個々の研究それ自体の深化のためにも、また専攻分野を異にする研究者間の交流という意味でもたいへん有意義であったと思う。なお、本研究会の記録は「Domesticationの生態学と遺伝学」と題し、近く印刷刊行の予定である。

(文責、野澤 謙)

行動研究会：霊長類の知的行動

——道具の使用を中心に——

期 日 昭和56年11月13・14日

場 所 霊長類研究所会議室

プログラム

司 会 水 原 洋 城 (東京農工大・農学部)

1. 野生チンパンジーの道具使用行動

上 原 重 男 (札幌大・教養部)

2. オマキザルの知的行動

伊 沢 紘 生

(宮城教育大・教育学部)

3. ニホンザルの道具使用行動

樋 口 義 治 (愛知大・教養部)

4. チンパンジーのトークン使用

室 伏 靖 子 (京大・霊長研)

討 論

糸魚川 直 祐

(大阪大・人間科学部)

植 松 辰 美 (香川大・教育学部)

岡 野 恒 也 (静岡大・教養部)

川 中 健 二 (岡山理科大・理学部)

乗 越 皓 司 (上智大・生命科研)

樋 口 廣 芳 (東大・農学部)

本 吉 良 治 (京大・文学部)

森 明 雄 (京大・霊長研)

行動の研究会として今年度は霊長類の知的行動をとりあげ、そのうち特に道具の使用を中心に話題を提供していただき、活発な意見交換を行った。

上原は野生のチンパンジーの異なる地域個体群にみられる採食のための道具使用(アリ釣り)を紹介し、その地域差の由来について検討した。

伊沢は、真猿類の中では下等な系統群とされている広鼻猿類に属するオマキザルが実に多様な知的行動を示すことを指摘し、そのうち、とくに、ヤシの実割り行動の16%フィルムおよびビデオテープを紹介した。

樋口は、約30頭のニホンザル放飼群の中へ自動販売機に似た装置を持ち込み、餌入手のための新しい手段が学習され伝播する様子を紹介し、道具使用とは何か、また道具とは何かの問題を提起した。

室伏は、浅野病休のための代演であったが、道具を、行動に対する機能という観点から定義・分

類することを提案し、具体例としてチンパンジーによる般用トークンの使用を紹介し、その位置づけを試みた。

総合討論では道具とは何かについて活発な議論がなされたが結論には至らなかった。しかし、自分で製作した道具と与えられた道具の違い等々、多くの興味ある問題点が指摘された。また、鳥類の道具使用などと比較して特に霊長類に特有と思われる道具使用行動があるかについても議論されたが、特に顕著な違いは見出されなかった。

(所内世話役 浅野・室伏)

第11回ホミニゼーション研究会

期 日 1982年3月12日～13日

場 所 霊長類研究所1階会議室

参加者 約60名

共通テーマ 「直立二足歩行をめぐる」

座長 江原昭善(京大・霊長研)

- 1) ロコモーションからみた二足歩行の起源
岡田守彦(筑波大)

座長 山口 敏(国立科博)

- 2) 食とデンティション
北原 隆(上智大)

座長 河合雅雄(京大・霊長研)

- 3) 道具使用と生態
渡辺 仁(北大)
- 4) アフリカの気候・環境変動
門村 浩(北大)

座長 大沢 済(日本モンキーセンター)

- 5) 走と生理
久保田 競(京大・霊長研)
- 世話人 江原昭善・河合雅雄・近藤四郎
鈴木 晃・渡辺 毅

第11回ホミニゼーション研究会は、年度末に退官をひかえた近藤教授に世話人に加わっていただき、「直立二足歩行をめぐる」という共通テーマでおこなわれた。岡田氏よりロコモーション・ワーキンググループの活動成果がまとめて報告され、climbing というロコモーション・パターンの重要性が指摘された。アフリカの気候・環境変動に関しては、数万年のオーダーで詳細な分析、復元がなされ興味深かったが、ホミニゼーションと対応する気候・環境変動の分析は、現状ではま

ったく不十分であり、環境面からのアプローチの困難さがうかがえた。

研究会が近藤教授退官記念パーティに引き続いて開催されたため、参加者一同ややきついスケジュールとなったが、2日間ともに活発な議論が展開され、世話人としては、満足すべき研究会であった。なお、本研究会の一部は、岩波「生物化学」に掲載予定である。

第10回ホミニゼーション研究会の記録が年報 vol. 11に未収録のため、ここにプログラムを付記しておく。

第10回ホミニゼーション研究会

期 日 1981年3月8日～9日

共通テーマ 「チンパンジーをめぐる諸問題」

座長 渡辺直経(帝京大)

- 1) チンパンジーとヒトの系統分岐(late divergence theory)をめぐる

渡辺 毅(京大・霊長研)

- 2) 分子進化からみたチンパンジーの系統分岐について

植田信太郎(東大)

座長 岡野恒也(静岡大)

- 3) チンパンジーの知能
室伏靖子(京大・霊長研)

座長 江原昭善(京大・霊長研)

- 4) チンパンジーの社会と行動にみられた地域差について

杉山幸丸(京大・霊長研)

- 5) チンパンジーの仔殺しとカニバリズム

川中健二(岡山理大)

- 6) ピグミーチンパンジーの性をめぐって

加納隆至(琉球大)

座長 伊谷純一郎(京大・理)

パネルディスカッション

「チンパンジーの社会をめぐる」

世話人 江原昭善・河合雅雄・
鈴木 晃・田中二郎・
渡辺 毅

(文責: 渡辺 毅)